

インドネシアの都市人類学

Urban Anthropology in Indonesia

インドネシアの都市にみる種族結合： ネットワークと同郷会

加 藤 剛*

Urban Ethnicity in Indonesia: Networks and Locality-based Associations

KATO Tsuyoshi*

Indonesian cities, especially Jakarta, have variously been characterized as having a poly-ethnic profile as one of their salient features. It is said that Indonesian cities are “a plural society” (H. Geertz), “a mosaic of ethnic groups” (J. D. Legge), and “a country in a city” (W. Mertens). These characterizations all indicate that Indonesian cities are a microcosm of the country, reflecting the ethnic diversity of Indonesia’s population. It seems that one can hardly discuss Indonesian cities without duly taking into consideration the question of ethnicity.

Despite such presumption, very little had, for a long time, actually been studied about urban ethnicity in Indonesia. A pioneer in this field of studies is Edward Bruner, who first conducted research among Toba Batak migrants in Medan in 1957–1958, and later in Bandung and Jakarta in 1970. It was only from the late 1970s, twenty years after Bruner’s initial research, that other scholars began to take an active interest in this topic. In addition to their works, studies on Indonesian urbanization and migration, which were largely initiated in the early 1970s, some-

times present research findings relevant to the consideration of ethnicity in Indonesian cities. Also available now are a considerable number of M.A. theses completed at the University of Indonesia, which deal with urban ethnicity but hitherto have seldom been referred to by scholars concerned with this topic.

In view of this increasing volume of literature touching upon urban ethnicity, it will be useful to review some of its findings, particularly if this can be done within a framework which allows us to relate to each other the various ways in which urban ethnicity is expressed in Indonesia. Examples of urban ethnicity are copious in personal anecdotes and scholarly works; but it remains to be seen how they are interrelated in a meaningful fashion. The present paper is intended to be a first step toward the amelioration of this situation.

I propose three forms in which urban ethnicity is expressed in Indonesia: (1) networks of family members, relatives, and people of the same local origin, all of whom generally share an identical ethnic background in Indonesia; (2) quasi-ethnic associations such as kin-based associations (e.g., Javanese *trah*), clan-based associations (e.g., Toba Batak *marga* associations), and locality-

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

based associations (e.g., Minangkabau village associations), which all implicitly and sometimes explicitly incorporate ethnicity as a principle of group-formation; and (3) ethnic associations, some examples of which are ethnic dance-and-music groups, ethnic students' unions, ethnic religious organizations, and ethnic political organizations, which utilize ethnicity as a major principle of group-formation and are established by and for unspecified members of an ethnic group, usually for specific purposes.

This paper has two limited aims within the scope of the above framework: (1) to review the literature on networks, and (2) to consider locality-based Minangkabau associations, through literature review and through my research in Jakarta in 1980–1981. The Minangkabau case is singled out because it has been relatively well studied; its examination will hopefully reveal how networks and one type of quasi-ethnic association are related.

The most extensive literature on networks relates to Jakarta. Research findings show that networks based on kin and commonality of local origin are almost universal among the various ethnic groups in Jakarta, for example, Javanese, Sundanese, Minangkabau, Batak, Bugis, Gorontalo, and Madurese. The networks are found to operate in the processes of migration decision-making, rural-urban migration, urban adaption, and rural-urban contacts. Such

networks are also mentioned in studies of Bandung, Yogyakarta, Semarang, Ujung Pandang, and Medan.

Studies of locality-based Minangkabau associations indicate that they often develop out of pre-existing kin/locality-based networks. Networks and locality-based associations in fact share similar functions, such as providing assistance in the case of misfortune and promoting social interactions among their members. Then, why do locality-based associations emerge at all? (Or why do they not in some cases?) Six factors are important in consideration of this question: (1) social norms and traditions in the homeland which may encourage the formation of locality-based associations; (2) socio-political status of an ethnic group in a given urban setting; (3) needs of an urban migrant community; (4) needs of the locality of origin; (5) historical circumstances; and (6) existence of leadership in a urban migrant community.

Locality-based associations are variable in the course of their organizational life. We always should try to study them diachronically with proper attention to the six factors mentioned above. In a sequel to the present paper, I plan to document the history of locality-based Minangkabau associations from the early twentieth century to the early 1980s. I hope there to explicate more fully the dynamics of locality-based associations.

多種多様な文化的タコツボのメンバーは、商業、政治、あるいは商店、役所においては、日常的接触があるやもしれない。しかし、若干の例外を除き、(他の面では) お互い距離を保っている。「複合社会」という言葉が、インドネシアの都市ほどびったりあてはまるケースは、他に類をみない。
H. Geertz [1967: 34]

ジャカルタは種族集団の形作るモザイクであり、ジャカルタ外に存在する(種族間の)競合関

係を縮図のように再現している。そしてジャカルタ社会の構造は、よりひろいインドネシア社会にみる対立を、際だった形において映し出してもいる。
Legge [1964: 169]

ジャカルタは、まったくもって都市のなかの国である。それは、自分の運を、このインドネシア文化のるつぼのなかで作り直そうと、インドネシアの隅々からやってきた人々により構成されている。
Mertens [1976: 50]

はじめに

「複合社会」(plural society), 「種族のモザイク」(mosaic of ethnic groups), 「都市のなかの国」(a country in a city)——インドネシ

アの都市は、種族を軸にしていろいろと特徴づけられてきた。これらの表現に共通するのは、インドネシアの都市、なかんずく首都ジャカルタが、多民族国家インドネシアの投影であるという認識である。

インドネシアの都市住民が、多様な種族の寄せ集めであるという事実以外に、多種族からなる都市での生活自体が、種族意識を活性化させる現象も、すでに以前から指摘されているところである [Skinner 1959: 8]。H. ギアツいわく、インドネシアの都市に住む地方出身者は、己の出身地域ないし出身種族の文化と、「都市文化」との二つの世界の間に生活している [Geertz 1967: 36]。

どうやら、われわれは、「種族」(ethnicity)を抜きにしてインドネシアの都市を語るわけにはいきそうもない。

I 「都市の種族」研究の概観

上に述べたような予感にもかかわらず、実際には、種族を正面に据えた都市研究は、インドネシアには驚くほど少ない。この分野で先鞭をつけたのは、アメリカの人類学者ブルーナーである。北スマトラ出身のトバ・バタック (Toba Batak) 族の都市移住民を中心に、彼は 1957-1958 年にスマトラのメダン市で、1970年にはジャワのバンドン市とジャカルタ市でそれぞれ調査を行なった。バタック族は幾つかの下位種族を包摂し、大きくはキリスト教徒とイスラーム教徒のグループに分かれる。そのなかでも、研究対象とされたトバ・バタックは代表的なキリスト教徒の種族である。ブルーナーの調査の内容は、都市の移住民と故郷の村との関係、父系制社会であるトバ・バタックが、都市で形成する父系氏族 (marga) 会の活動、メダン、ジャカルタ、バンドンという三つの都市にみる父系氏族会あるいはバタック族全体のための親睦会の比較、さらには都市のトバ・バタック社会に適用される“バタック理念”の分析などである [Bruner 1959; 1961; 1963; 1972; 1974]。

ブルーナーの最初の調査から四半世紀以上たったにもかかわらず、残念ながら彼の研究

以外、インドネシアの都市の種族に関する研究蓄積には、長い間あまり注目すべきものがなかった。彼の調査以降、「都市の種族」(urban ethnicity) に関する研究の試みが、インドネシアで皆無であったわけではない。オランダ時代および独立後の二次的資料を使いながら、ジャカルタ市の種族別人口構成の分析を行なったキャスルズの研究 [Castles 1967] は、この間の重要な業績の一つである。

ほかならぬブルーナー自身も、1970年のバンドン調査においては、主としてイリノイ大学における彼の指導下の人類学部大学院生を動員し、バンドン市在住のトバ・バタック族、ミナンカバウ (Minangkabau) 族、スンダ (Sunda) 族、ジャワ (Jawa) 族の比較研究を試みている [Bruner 1970]。しかしながら、ニューヨークに本部をおく SEADAG (Southeast Asia Development Advisory Group 東南アジア開発顧問グループ) から、比較的潤沢な資金援助を受けたとみられるこのプロジェクトの成果は、私の知る限り、ブルーナーの論文だけであり [Bruner 1972; 1974]、彼の学生は、最終的には上記プロジェクトとは違う内容の調査を行い、博士論文を提出している。¹⁾ ブルーナーの教え子のなかに、彼の調査

1) ブルーナーのバンドン・プロジェクトにおける研究対象諸種族の調査分担は、SEADAG への報告 [Bruner 1970: 1-2] によると、次のとおりである。(1) ジャワ——スパルラン (Parsudi Suparlan), (2) ミナンカバウ——ハルソヨ (Harsojo), (3) トバ・バタック——ブルーナー, (4) 都市在住スンダ・エリート——ホリコシ (Hiroko Horikoshi), (5) 都市在住スンダ下層民——ウッド (Caroline Wood), (6) 農村在住スンダ——ウェッシング (Robert Wessing)。このうち、ハルソヨ (当時パジャジャラン大学教授) を除き、あとはブルーナーの学生である。ホリコシとスパルランの博士論文 [Horikoshi 1976; Suparlan 1976] は、バンドン・プロジェクトと直接の関係はなく、また、ウッドとウェッシングが博士論文を提出した形跡はない。

関心を具現する人が現れたのはつい最近のこととて、既提出の博士論文が一つ [Pelly 1983], 近々提出予定の博士論文が一つあると聞いている。²⁾

最後の例に代表されるように、インドネシアの都市の種族を扱う研究が、この数年、ようやく幾つか発表されるようになった。ほかの例を挙げると、(1) Abustam [1977]——南スラウェシ州ウジュン・パンダン (Ujung Pandang) へのトラジャ (Toraja) 族の出稼ぎ形態と、彼ら出稼ぎ人が多く従事する職業 (靴職人) に代表される都市での生活形態の叙述、(2) 加藤 [1983]——ジャカルタのミナンカバウ同郷会を例とする都市移住民の分析、(3) 加藤 [1986]——ジャカルタにおける主としてミナンカバウ族の種族内婚の歴史的推移、(4) Persoon [1982]——パダン・レストラン、同郷会、個人史をとおしてみたジャカルタのミナンカバウ出稼ぎ・移住民の生活、³⁾ (5) 上記 Pelly [1983]——ミナンカバウおよびマンダイリン (Mandailing 北スマトラ南部のバタック系の一種族でイスラーム教徒) のメダンへの地理的移動の歴史と、両種族がメダンで別々に有力メンバーとなっている二つのイスラーム組織ムハマディヤ (Muhammadiyah) とワシリヤ (Washliyah) の活動、(6) Sairan [1982]——ヨグヤカルタ (Yogyakarta) を中心に発生したと考えられるジャワ族上層階層の一部に存在するトゥラの分析、⁴⁾ (7) Salmon and

Lombard [1977]——仏教、道教などの寺院を中心に考察したジャカルタ中国人社会の概要、といった研究がある。

上記以外にも、Forbes [1978], Hugo [1981b], Jellinek [1978], Kato [1982], Lerman [1983], Naim [1979] などの研究も、直接的には都市への地理的移動をとり上げたものではあるが、その分析結果のなかに、「都市の種族」への関連を読みとることができる。また、これまであまり紹介されることはなかったが、インドネシア大学に提出された修士論文のなかに、在ジャカルタの特定種族を扱ったものがある。⁵⁾ いずれにしても、インドネシアの「都市の種族」研究は、1970年代の後半以来、ようやくその緒についたといえる。

すでに述べたように、ブルーナーが最初にメダンで調査を行なったのは、1957-1958年のことであった。これは、のちに、インドネ

われる [Sairan 1982: 31]。起点として選ばれる祖先は、特定王家の基盤を築いた人、著名なイスラーム教師、飲食業で財をなした女性と、いろいろである。なお、ジャワ族は系族 (lineage) の制度をもたない。

- 5) 私がインドネシア大学の文学部 (Fakultas Sastra) および社会科学部 (Fakultas Ilmu-Ilmu Sosial) の図書室で閲覧した修士論文として、Amali [1970], Lobarnebal [1973], Marzali [1973] (ガジャ・マダ大学への提出論文であるが、実質的調査はインドネシア大学所属中に行われた)、Pandjaitan [1977], Roosmalawati [1979], Sis [1970], Suparlan [1963], Surjohardjo [1974], Swasono [1974], Waworuntu-Osman [1975] がある。これらの論文の多くは、クンチョロニングラット (Koentjaraningrat) とヤコブ・フレーデンブレヒト (Jacob Vredendregt) の指導になるが、とくに後者は、シンガポールのパウエアン (Bawean) 移住民社会の研究も行なっているところから [Vredendregt 1964], 「都市の種族」が学生の修士論文のテーマとして選ばれるにあたって、このオランダ人人類学者の影響が強かったのではないかと思われる。パウエアンは、ジャワ海に浮かぶ小さな島の名前である。

2) 私の漏れきいているところでは、提出間近とみられている博士論文は、メダン在住トバ・バタック族の家庭における、トバ・バタックとしての社会化 (socialization) の問題を扱っているとのことである。

3) パダン・レストラン (restoran Padang) は、香辛料をきかせたミナンカバウ料理 (パダン料理ともいう) を供する店で、都市に多い。パダンは、西スマトラ州の州都である。

4) トゥラ (trah 親族会) は、特定の祖先を起点に双系的に規定される子孫の集まりで、その形成は古くは1910年代にまでさかのぼるとい

シア独立後のジャワ社会研究の火つけ役ともなった C. ギアツ (Clifford Geertz) たちの調査に遅れること、わずかに4年である。このように、比較的早い時期に研究の出発点があったにもかかわらず、種族の都市人類学的研究は、なぜインドネシア研究においてもっと早く関心と呼ぶことがなかったのか。

ブルーナーの研究の影響力の問題は別にしても、上の疑問にたいして、幾つかの答が考えられる。たとえば、(1)人類学者、社会学者ともに、これまでインドネシアの農村研究が中心であり、都市にまであまり関心がひろがらなかった、(2)インドネシア諸社会を研究する人のなかで、ジャワ社会の研究者が最も多く、ひるがえって、人口・政治の面で絶対的優位を保つジャワ族の間では、種族結合が重要視されるようにはみえない、(3)国民統合のため種族意識の高揚を推えようとしているインドネシアにおいて、都市の種族の研究は、まさに種族意識を真っ向からとり上げるわけで、こうした研究の実施は、これまでの政治状況下では難しい、など。そして、さらには、「都市の種族」というテーマ自体が、あるいは、「種族」が政治的に骨抜きとされている現況では、インドネシアの都市社会を理解する面で、あまり有効な分析枠ではないのかもしれない。⁶⁾

ともあれ、「都市の種族」に関するある程度の研究蓄積がみられるようになった現在、これまでの研究成果を概観し、都市研究における分析枠としての「種族」の限界を探り、さらには将来にわたる研究の展望を模索することも必要であろう。そうすることが、インドネシア都市研究における「種族」の正しい

評価にも繋がることになるのであろうから。

上記作業のための手順として、本稿では、都市における種族結合形態の類型化と比較に焦点をあてる。具体的には、種族結合を、「種族」を内包し、あるいは「種族」を中心として発現する人間関係の展開ないし集団形成・集団活動と理解し、種族結合の形態を三つに分けて考える。

1) 「種族」が結合原理として意識されることは少ないにしても、インドネシアにおいては多くの場合、「種族」が先験的に内包されているところの親族や同郷者間の繋がり、すなわち親族、同郷者のインフォーマルなネットワーク (network)

2) 同一親族、同一氏族、同一地域（とくに同一村）の出身者が形成する親族会(kin-based association)、氏族会 (clan-based association)、同郷会 (locality-based association) のように、間接的にせよ「種族」が結合原理として関わっている準種族的結社(quasi-ethnic association)

3) 特定種族に属する不特定の人々が、「種族」を主たる結合原理として特定の目的のために形成する種族的結社 (ethnic association)

3 類型の説明からわかるように、本稿では、種族結合を特定種族全体の結合を目指す動きや「種族」を中心的結合原理とする集団形成・集団活動に限定せず、より幅のひろいものとして理解した。このような解釈により、種族結合に関連するさまざまな研究蓄積が鳥瞰できると考えただけでなく、種族によっては、組織化された種族結合が希薄なのはなぜかといった問題関心も、考察の視野に入れることが可能であろうと考えたからである。

類型の説明にもみられるように、結合原理としての「種族」は、上記3)種族的結社において最も顕著である。しかし、1) ネットワークや2) 準種族的結社も、インドネシアの都市移住民にとって親族、出身地、種族が大部分において重なりあう以上、「種族」と無縁で

6) 都市研究のみならず、インドネシア研究における分析枠としての「種族」の有効性に関する疑問については、Kahn [1982] を参照。ただし、カーンも、分析対象としての「種族」の重要性を否定しているわけではない。

はありえない。次項で述べるように、「種族」の一側面である地方語や郷土料理の日常的体験の場はネットワークである。私がジャカルタのミナンカバウ移住民の調査をしていた時も、ジャワやスンダと違いジャカルタのミナンカバウには、売春婦にまで身を落とす女性がいなかったことが挙げられ、彼らの親族・同郷ネットワークの相互扶助の強さが「種族」によって説明されることがしばしばあった。

準種族的結社に「種族」が関わっていることは、ミナンカバウの村スリット・アイル(Sulit Air)の同郷会の、次のような定款の文句に窺われる——「われわれは以下のことを十全に自覚するものである。即ち、スリット・アイル人は、ミナンカバウ社会の一員としてミナンカバウの慣習法や風俗習慣を心から尊重し、かつまたイスラーム教をあつく信仰するものである」[Buku Petunjuk Musyawarah SAS Ke VII 1981: 12]。

種族結合形態のうち2)と3)、とりわけ3)は、自発的結社(voluntary association)としての性格が強い。2)の同郷会と親族会、氏族会は、地縁と血縁という異なる組織原理に依拠するが、多かれ少なかれ故郷での社会規範へ志向し、会の目的、活動も主としてメンバーの社会福祉を目指すところから、ここでは同じ範疇に括って考えた。3)の具体例としては、1980-1981年に私がジャカルタ在住ミナンカバウの間で見聞したものに、次のようなものがある。(1) Kesenian Minang Rantak Kudo——ミナンカバウ芸能・演劇集団、(2) Gumarang——ジャカルタのサッカー・リーグに加盟しているミナンカバウ・チーム、(3) Yayasan Bunda——アダム・マリク副大統領夫人(1981年当時)が主催するミナンカバウ・エリート夫人の集まり、(4) Yayasan Kebudayaan Minangkabau——ジャカルタ在住ミナンカバウ知識人の集まり、(5) Armindo (Asosiasi Restoran Minang Indonesia)——

パダン・レストラン経営者の集まり、(6) Kesenian Kumbang Janti——シラット(silat 太極拳のように空手と踊りを一緒にしたような護身術)を守りひろめる会、(7) Tuah Sekato Penyar Minang Jakarta——ミナンカバウ語によるラジオ放送番組の関係者の集まり、(8) Keluarga Mahasiswa Minangkabau——ミナンカバウ出身の大学生の集い。また、これはミナンカバウではないが、のちに述べるバタック族の教会組織に代表される宗教団体も、種族的結社に入れてよいであろう。なお、現在のインドネシアの政治状況下では、種族的政治結社は存在しえない。

結合原理としての「種族」は、1) ネットワーク、2) 準種族的結社、3) 種族的結社の順に顕著である。しかし、「種族」に対する感情移入の度合いは、必ずしもこの序列に準ずるものではない。上のミナンカバウの種族的結社の例が示すように、現在の政治状況のもとでは、種族的結社は多くの場合、同業者、同好者、同階層者(とくに上層階層者)中の特定種族出身者の親睦会ないしサロンの様相を呈しており、「種族」がこれら親睦会を形成する主たる「口実」ではあっても、強度な感情移入をとまなう結合原理として働いているようには思われない。また、3形態のうち、1)と2)の間には連続性を認めつつも、三者の間に種族結合形態の発展段階を想定しているわけではない。

上記3種類の種族結合の形態は、あくまでも便宜的なものであり、総ての種族結合の形を網羅しているとは考えていない。各形態間の移行形態、都市における種族的境界(ethnic boundaries)の再構築現象、あるいは南アフリカにおけるように、「白人」、「黒人」といった大きな種族・民族のカテゴリーが、それ自身で意味をもつような状況も想定されるが、いずれについてもインドネシアにおいては研究蓄積が乏しく、本稿の議論からは一応捨象

した。⁷⁾

従来、インドネシア都市部における種族的紐帯が指摘される場合、種族結合の形態が区別されることなく、種族結合の事例、具体例が、あたかも無作為抽出のごとく提示される傾向にあった。種族結合の形態を分けて考えることにより、これまでの「都市の種族」研究の成果が鳥瞰されるだけではなく、異なる種族結合形態間の相互関係についても、新たな視点を得ることができるようではないか、というのが私の抱負である。

上記3種類の種族結合のうち、今回は1)のネットワークと、2)のうちの同郷会について考察する。ネットワーク考は、過去のこの研究テーマに関連する調査結果の点検であり、同郷会考は、1980年10月から1981年12月にかけて、途中病気で中断はしたものの、私が在ジャカルタ・ミナンカバウ族に関して行った調査結果を中心としての検討である。ミナンカバウの同郷会に考察を絞ったのは、過去の研究蓄積が比較的豊富であること、そして、また、他種族の準種族的結社に関する研究がまだ乏しい現状では、特定種族の事例を検討するほうが、ネットワークと同郷会、ひいてはネットワークと準種族的結社の関係について、より明確な展望が開けるのではないかと考えたからである。

ネットワーク、同郷会の考察ともに、現今の状態に限定されている。しかし、本稿の結論として、近いうちに、ミナンカバウ同郷会の発展をオランダ時代から現在にわたって跡づけ、その特徴の歴史的展開を振り返ってみたい。本稿の最終項で述べるように、同郷会は、そしておそらくほかの種族結合形態も、その様態は歴史的に変容するものであり、通

時的視角は「都市の種族」研究に不可欠である。ミナンカバウの種族的結社や、インドネシア他種族の種族結合については、いずれ機会を改めて検討したいと考えている。

II 「種族」の体験

インドネシアの都市に住む人々にとり、「種族」の体験は日常茶飯である。この体験は、早くは生まれ故郷をあとにし、都会に出てくる過程から始まる。言葉、景色、家屋様式、宗教建築物、服装、料理——それまで生活の一部として、比較的無意識に受け入れられてきたこれら日常性の諸側面は、都会で異質なものと触れることにより、己の出身種族の特徴として再認識されるようになる。

都会に住みついたあとも、「種族」の体験は続く。地方出身者の家庭の食卓にのぼる料理は、おそらく多くが郷土色の強いものに違いない。私がジャカルタで知っている一家族は、ご主人がミナンカバウ人、奥さんがジャワ人であったが、すでに何十年とジャカルタで暮らしているご主人のために、奥さんはジャワ料理よりはるかに辛いパダン料理を、毎日調理するとのことであった。

家族が日常的に話す言葉も、都会生まれの「二世・三世」、夫婦の出身種族が異なる家庭、あるいは高等教育を受けた一部の人々を除き、ほとんどが地方の言葉である。たとえば、1973年に、アトマ・ジャヤ大学が行なったジャカルタの行商人1,000人に関する調査結果によると、行商人の出身地域を示す数字と、家庭での日常言語とを示す数字の間に、わずかの開きしかなく(表1)、ジャカルタ在住行商人のほとんどが、出身地域の言葉を家で話していることがわかる。

言葉は、時には、家庭の外にまでその影響力がひろがる。ジャカルタの HKBP (Huria Kristen Batak Protestan バタック・プロテス

7) 種族的境界の変容・再構築の例は、幾つかの下位種族を包摂するバタック族について報告されている [Bruner 1972; 1974; Castles 1972; Pelly 1983]。

表1 在ジャカルタ行商人の調査にみる出身地域と日常言語

出身地域	西ジャワ	中・東ジャワ	ジャカルタ	西スマトラ	その他	合 計
	39.5%	27.1%	13.4%	14.6%	5.4%	100%(n=1,000)
日常言語	スンダ	ジャワ	パタウィ	ミナンカバウ	その他	合 計
	32.1%	29.5%	17.3%	14.0%	7.1%	100%(n=1,000)

出典：Hawkers in Jakarta Vol. 1 [1976: 170]; Vol. 2 [1976: Tables 79, 82]

タント協会)では、自己の組織の教会をトバ・バタック族以外のプロテスタントにも開放すべく、月に1度、日曜日の礼拝をインドネシア語で行うようにした。ところが、インドネシア語での礼拝日には、毎回バタック会衆者が減少してしまったということである [Pandjaitan 1977: 57-58]。

言葉や料理ほど日常的ではないにしても、都会でも定期的に表出し体験される「種族」に、結婚式にともなう伝統や儀式、衣装、音楽がある。花嫁の衣装をみただけで、代表的グループについては出身種族を判別することができるほど、結婚式の様式が、都会でもつ種族的アイデンティティを表出する力は強い。したがって、種族外婚が起こった場合、どちらの種族の儀式・伝統を使うか、あるいはどのように二つを折衷させるかは、両当事者、とくに彼らの親にとって重要事である。

「種族」の体験には、これまでの例のように、当該個人の選択や決断をあまり含むことなく、比較的日常的、習慣的に繰り返されるものもあれば、個人個人によってより選択的、主体的に求められるものもある。たとえば、都会で楽しめる娯楽がある。ジャワ人なら、これはワヤン (wayang 伝統音楽をともなう影絵芝居) のラジオ放送を聞くことであり [Surjohardjo 1974: 107, 110], ジャカルタに住む他種族なら、「国軍ラジオ放送」(Radio ABRI) が曜日をかえて流すアンボン

(Ambon), ミナンカバウ, スンダ, バタック (そしてもちろんジャワ) の種族番組をきくことであるかもしれない。⁸⁾ 市場としてどれだけの大きさがあるかは知らないが、ジャカルタのカセット・テープの店には、いろいろな地域の芸能、音

楽、芝居のテープも売られている。

主体的に選択され求められる「種族」体験・「種族」表出の幅を、私がジャカルタで観察したミナンカバウの例でいうと、たとえば西スマトラで発行されている新聞『シンガララン』(Singgalang) または『進路』(Haluan) の定期購読、1980年以来毎年ティムの劇場で催されている「ミナン歌謡曲大会」(Festival Lagu Minang Populer) の観賞、1970年代初頭に始まったスナヤン (Senayan) 競技場でのジャカルタ在住ミナンカバウ全体のためのレバラン祭 (Lebaran イスラームの断食月明けの聖祭) への参加、ジャカルタの14の民間ラジオ放送局が流すミナンカバウ番組の愛聴、ミナンカバウ音楽やドラマのカセット・テープの購入、西スマトラの有名な景色、とくにブキティンギのンガレイ (Ngarai) 峡谷の絵による自宅の居間の壁の飾りつけ、庭の小鳥小屋の屋根をミナンカバウ風家屋のそれに擬して作ること、あるいはベルソーンが観察した、ミナンカバウ・ベモ運転手によるミナンカバウ人経営屋台店の溜り場としての利用 [Persoon 1982: 150], などがある。⁹⁾

8) これらの種族番組についての情報は、ミナンカバウ番組を担当している Juss Paramato Intan とのインタビュー (1980年12月27日) による。

9) 『シンガララン』、『進路』ともに、ジャカルタに代理店があり、首都で購読可能である。な

ミナンカバウ族ではなく、これは北ジャカルタに住む南スラウェシ出身のブギス(Bugis)族の事例であるが、217人の世帯主に関する調査によると、84%の人にとって、同じブギス人との交友関係が最も深く、82%の人にとって、理想的仕事仲間としてブギス人が最も望ましいとの結果である [Roosmalawati 1979: 207-208, 259]。また、上記ペルソーンは、パダン・レストランで働くスンダ人の例として、多くのミナンカバウの同僚に囲まれ、仕事場への帰属意識がもてず、あまり幸せではないという話を語っている [Persoon 1982:

お、シンガランは、西スマトラの山の名前で、ムラピ山 (Gunung Merapi) と並んで有名であるが、後者と同名の山はジャワにもあり、そのため1968年12月創刊のこの新聞の名前には、前者が選ばれたということである (創刊者のひとり Nazif Basir との1981年1月7日のインタビューによる)。ティム (TIM または Taman Ismail Marzuki) は、劇場、展覧会会場などからなる一種の総合芸術施設である。ミナンカバウ人は、略してミナンないしパダン人 (orang Padang) とも呼ばれる。「ミナン歌謡曲大会」は、オリジナルなミナン歌謡曲 (歌詞はミナンカバウ語) の競作のためのもので、地区予選を勝ち残った優秀曲10曲が、この大会でプロの歌手によって歌われ、最優秀曲が選ばれる。優秀曲10曲は、カセット・テープとしても売り出されている。スナヤン競技場でのレバラン祭は、多くのジャカルタ在住ミナンカバウ人を引きつけるようで、1972年1月の聖祭には、20,000以上の人が競技場に集ったという (Aneka Minang, No. 1, 1972 の記事 “Halal Bil Halal Sumbar 2 Januari 1972” を参照)。私がジャカルタに滞在した1981年のレバランには、この集団祝賀がジャカルタで開かれた形跡はなく、そのかわりに1981年8月30日に、バンドンのスポーツ・ホール (Sport Hall Pajajaran) で、「バンドン・ミナン社会・親睦の夜」(Malam Silaturahmi Masyarakat Minang Bandung) が開かれている。ジャカルタのミナンカバウ・ラジオ番組についての情報は、1981年の「第2回ミナン歌謡曲大会」のプログラムによる。ベモ (bemo) とは、小型の軽自動車で、近距離の乗合自動車として使われる。

169]。ブギスの例、同一出身種族経営の屋台店を溜り場とするミナンカバウ・ベモ運転手の例、さらにはパダン・レストランに働くスンダ人の例といい、都市での交友関係も、「種族」によって大きく規定されていることが窺える。「ミナンカバウ人は一般的に誰とでもうまくやっていける。しかし、やっぱり“自分たちの人間”とのつきあいが一番打ち解ける」——ジャカルタの南外れチランダック (Cilandak) に住むミナンカバウ人たちのための親睦組織、ASA (Awak samo Awak われわれ同士) のメンバーの言葉である [ibid.: 160]。軍の官舎のように、多様な種族の出身者が無作為に集められたと思われるような居住空間、そして比較的経済的にも保障されていると思われる生活においてさえ、バタック、ミナンカバウ、メナド (Menado) といった種族ごとの親睦会が存在するというのも [Muflich 1979: 85]、交友関係における「種族」要素の強さを物語っている。

「種族」の体験は、己が主体としての体験だけにとどまらず、己が客体としての体験をも含む。都市への新来者が、自己の種族的背景を自覚させられるのも、他種族のメンバーによる「自己」の特定種族カテゴリーへの分類化・客体化によるところが大きい。種族カテゴリー、さらには種族ステレオタイプ (「口のうまいミナンカバウ人」、「粗野なバタック人」、「血の気の多いブギス人」など) を用いての、己による他者の認識・同定、あるいはそのまた逆は、都市生活ではきわめて日常的である。したがって、居住地の隣近所の住人、近くの雑貨屋の主人、学校友だち、商売仲間、職場仲間といった、自己のまわりに存在する人間関係の認識地図においても、人々の出身種族・出身地域が、一種の目印となっている。私が、ごみごみとしたジャカルタの居住区で、インタビューのため人の家を捜しまわった時も、住所、名前に加えて、捜し求

める家の人がどこ出身の人か、と聞き返されることがしばしばであった。

上述のような「種族」の体験は、1960年代にスマトラのパカンバルで、「ミナンカバウ族」と「バタック族」との間に時折偶発したといわれる種族衝突のような場合を除き、それ自体で直接種族結合と結びつくことは珍しい。本稿では、こうした、カテゴリーとしての「種族」の体験の存在を認めつつも、より恒常的な種族結合の形を、ミクロなレベルを出発点として考察する。とくに、家庭での食事や日常言語でもわかるように、親族、友人、同郷人といった、結果的に同一種族に属する人々のインフォーマルな繋がりが、種族意識のいわば素材を再生産し、種族結合の一つの基盤となり、さらには「種族」の体験に、自己にとっての身近な意味を付与するものであると考えたい。都市への地理的移動、あるいは都市での生活において、「種族」を内包するこうしたインフォーマルなネットワークが存在することの確認は、都市の種族を語る際、避けてとおることのできない基礎的な作業であろう。以下では、インドネシアのなかでも、この点に関して最も情報量の多いジャカルタについて、調査結果を概観する。

III 地理的移動とネットワーク

他の東南アジア諸国の首都と同じように、ジャカルタの人口は第2次世界大戦後急激に増加した。1941年から1947年にかけて50万から60万前後であった首都人口は、1949年には100万を軽く突破し、その9年後の1958年には200万台を、さらに1963年には300万台を記録している [*Jakarta dalam Angka* 1980: 17]。その後も人口は増え続け、1980年センサスの結果は650万であった [*Penduduk Indonesia* 1980 1981: 9]。

このように急激な人口増加は、その多くを

地方からの人口流入に負っている。1961年と1971年のセンサスを比較したスピーア (A. Speare) の計算では、ジャカルタにおけるこの10年間の人口増加分のうち、人口流入による増加の割合のほうが、首都人口の自然増加による割合よりは高かったであろうとの結果であった [Hugo 1981c: 71]。後者の自然増加部分にも、実際には都市移住民の子供も含まれているわけで、この点を勘案して1971年センサスをもとに推計すると、当時のジャカルタ人口の3人にふたりは、地方からの移住民ないしその子供（年齢20歳以下の子供）であろうとの結論である [Speare 1975: 68]。東南アジアの六つの大・中都市で、行商人 (hawkers) に関する大規模な調査を行なったマッギーたちの研究結果をみても、都市在住行商人の出身地を調べる限り、これら都市のなかで、ジャカルタほど古典的な移住民都市 (migrant city) のステレオタイプに合致し、それも全国からの出身者が集中する移住民都市はほかにないとのことである [McGee and Yeung 1977: 105-106]。¹⁰⁾

移住民や出稼ぎ人が故郷をあとにする場合、「ジャカルタにいけばなんとかなる」と、ただあてもなく出かけることはまずない。¹¹⁾「ボストンバッグ片手にプラットホームに降り

10) マッギーたちが調査した都市は、クアラ・ルンプール、マラッカ、マニラ、バギオ (Baguio)、ジャカルタ、バンドンである。すでに述べたアトマ・ジャヤ大学の在ジャカルタ行商人の調査も、このプロジェクトの一環である。

11) 地理的移動を問題にする場合、近年指摘されているように、定着的移動を示す移住 (migration) と、一時的移動を示す循環 (circulation) ないし出稼ぎとを区別するのが本筋であろう。しかし、本稿では、両者の区別が議論の進行に深く関わることはなく、地理的移動の意味で、「移住」と「出稼ぎ」という言葉を互換的に使用する。なお、インドネシアや東南アジアにおける循環的移動の重要性については、Goldstein [1978] と Hugo [1982] を参照。

たち、いくあてもなく途方にくれる田舎者」
「都会砂漠で友だちもなく孤独な毎日を送る
地方出身者」——このようなイメージが、出
稼ぎ都市住民に関する一つの固定観念として
われわれの頭のなかにある。しかし、こうし
たイメージが間違っていること、それもとく
に「第三世界」では通用しないことは、幾多
の研究の示すところである。これらの研究
は、都市への地理的移動過程、さらには都市
生活における、家族、親族、友人、同郷出身
者間の社会的ネットワークの重要性を指摘し
ている [Hugo 1981a]。この点につき、ジャ
カルタ在住移住民に関する諸調査の結果を例
に、少し詳しくみてみよう。

1. 1973年にテンプルは、ジャカルタに
やってきた移住民の社会的背景やジャカルタ
での生活振りを調べるべく、ジャカルタ内の
世帯を任意に抽出し、そこから年齢14歳以
上、ジャカルタ滞在5年以内の男女移住民約
3,200人のサンプルを得ている。ジャカルタ
滞在年数が短いということもあるのであろ
う、テンプルの移住民サンプルの職業には、
あまり社会的地位の高いものはみられない。
多いほうから順にいうと、主婦(23.3%)、熟
練労働者(20.9%)、非熟練労働者(19.1%)、
飲食物の行商人(12.5%)、学生(9.2%)
などである [Temple 1974: 143]。この調査
の結果によると、ジャカルタへ出発する以前
に、ジャカルタでの生活に関する予備知識を
もっていた人の数は82.2%にものぼり、それ
もこの知識の供給源——これはひろい意味で
の“コネ”といっていよいであろう——のうち
85%は、ジャカルタにすでに住んでいる親戚
や友人であった [ibid.: 99-100, 131]。¹²⁾

テンプルは同じ調査プロジェクトのなか

12) 「友人」という言葉は、これ以後の調査結果で
も何回か出てくるが、その意味は必ずしも明
らかではない。しかしながら、ジャカルタ生
活の経験のない人々にとって、「友人」とは

で、世帯の任意抽出という手だてでは接近す
ることの難しい人々、たとえば住民台帳に登
録されることの少ない下層民をも調査対象に
入れるべく、行商人、ベチャ引き、売春婦、
不法占拠者 (squatters このサンプルでは多く
は屑拾い) をそれぞれ200人から300人ずつほ
どインタビューしている。¹³⁾ これら貧しいが
ゆえに、都市生活に関する情報源や都市に
“コネ”をもたないであろうと思われる人々
でさえ、事前に“コネ”のなかった人の割合
は、行商人、ベチャ引き、売春婦、不法占拠
者の順に13.8%、14.6%、26.2%、28.8%で
あった [ibid.: 99]。

2. 親族、友人、同郷者からジャカルタに
ついての情報を得るだけではなく、実際にこ
うした人々を頼ってジャカルタへやってくる
事例も数多く報告されている。それも、地理
的移動におけるこの依存の形をとおして、当
該出身地からのジャカルタ移住の開拓者を起
点に移住の輪が順次拡大し、いわゆる「連鎖

多くの場合、他郷出身者や他郷での学友では
なく、家族・親戚以外の同郷出身者を指すの
ではないかと思われる。ちなみに、テンプル
の任意抽出世帯サンプルにおいて“コネ”を
もっていた人たちのうち、事前にジャカルタ
を訪ねたことのある人は4.6%にすぎない
[Temple 1974: 131]。親族だけでなく、同村
出身の友人間の繋がり的重要性は、西ジャワ
からの出稼ぎ・移住活動の調査を行なったヒ
ューゴも指摘しているところである [Hugo
1981a: 187-188]。

13) 一時訪問以外の目的で都市へやってきた者
は、正式には都市での着き先の「隣組」
(Rukun Tetangga) の長を通じて、ジャカル
タの末端行政機構に自分の到来を届け出な
ければならない。しかし、この手続きは、費用
や書類の整備など難しい問題があるため、下
層民は無視するのが常である。ジャカルタ
の「隣組」については、Logsdon [1974]
とAldrich [1981: 121-123] を参照。ベチャ
(beca) とは、三輪自転車の人力車のようなも
ので、人や荷物を乗せて走るための近距離を
中心とする交通機関である。

移住」(chain migration) 現象が起こることが、ミナンカバウ [加藤 1983: 51; Marzali 1973: 104-105, 110-111], ゴロンタロ (Gorontalo 北スラウェシ出身) [Amali 1970: 101-102], ブギス [Roosmalawati 1979: 306], マドゥラ (Madura) [Lobarnebal 1973: 14, 94] の諸種族について記録されている。

3. 先のテンプルの調査によると、ジャカルタにやってくるという行程自体、われわれの想像とは逆に、必ずしも孤独な旅ではない。ひとりだけでジャカルタにやってきたのは、1. の任意抽出世帯および行商人、ベチャ引き、売春婦、不法占拠者のサンプルの順にいうと、33.8%, 50.4%, 55.6%, 64.7%, 56.2%であり、全体で50%前後であった。その他の人は、キョウダイ、オジ、ジャカルタ在住ないし村在住の友人、両親、伴侶、他の家族などにつき添われてのジャカルタ行である [Temple 1974: 138]。

同様に、ジャカルタ在住マドゥラ人 100 人についての調査においても、ひとりでジャカルタに出てきたのは10%ほどで、残りの90%は家族や同郷人と同伴でジャカルタへやってきている [Lobarnebal 1973: 91-92]。

4. ジャカルタへやってくるための旅費についても、通常、家族や親族の助けを受けていると思われる。ジャカルタを含むバンドン、スマラン (Semarang), ヨグヤカルタ、スラバヤというジャワの五つの大都市に住む約 8,000 人の地方出身者についての調査結果によると、このうち自力で旅費を調達したのは 33.7%で、59.5%の人は、両親、キョウダイ、オジ、夫などに旅費を工面してもらって

いる [Suharso *et al.* 1976: 49]。

5. ジャカルタ到着後も、親族や友人との繋がり重要である。表 2 は、最初にジャカルタにやってきた時の居候先に関する三つの調査の結果である。ヒューゴの調査は、西ジャワの14の村からジャカルタに移り住んだ人々についてのものであり、ナイムの調査は、西スマトラ出身の主としてジャカルタ在住ミナンカバウ移住民について、そしてタントウのものは、東ジャカルタのプ라우・ガドゥン (Pulau Gadung) に住む移住民世帯の世帯主に関する調査である。なお、タントウのサンプルの出身地は、西ジャワ (29%), 中ジャワ (44%), 東ジャワ (9%), 外島 (18%) である [Tantu 1979: 54]。表 2 の示すとおり、居候先は圧倒的に“家族・親戚”が多く、“友人”がそれに次いでいる。

6. 表 2 の調査のうち二つは、移住民のジャカルタ到来後、誰が彼らの仕事を見つける手助けをしたかについても質問している。この点に関するもう一つの調査結果を加味したまとめが、表 3 に掲げてある。表 2 と同じように、“家族・親戚”の助けが大きく、“友人”が 2 番目に重要であることがわかる。

表 2 出稼ぎ・移住民のジャカルタ到着後の寄宿先

出身地	家族／ 親 戚	友人	その他	サン プル 数	出 典
西ジャワ	56%	21%	23%	290	Hugo [1981b: 205]
西スマトラ	66%	33%	1%	427	Naim [1979: 181]
主として ジャワ	66%	24%	10%	112	Tantu [1979: 56]

表 3 出稼ぎ・移住民のジャカルタでの仕事の斡旋者

出身地	家族／ 親 戚	友人	その他／ 自分自身	サン プル 数	出 典
西ジャワ	50%	28%	22%	290	Hugo [1981b: 209]
西スマトラ	52%	25%	23%	427	Naim [1979: 181]
南スラウェシ	54%	26%	20%	217	Roosmalawati [1979: 254]

同じく仕事との脈絡において、ジャカルタ在住トバ・バタック女性の密輸商品の担ぎ屋56人に関する調査によると、彼女らのうち64%が家族に、25%が友人に商売の資本を提供してもらったという結果が出ている [Pandjaitan 1977: 118]。¹⁴⁾

7. 表3と同様の結論は、たとえ統計的には結果が提示されていないにしても、移住民の出身地と特定職種との結びつきから、次のような職業についても観察されている——アイスクリーム売り、建設現場の労働者、ベチャ引き（以上ジャワ人）[Jellinek 1978: 145; Pabel 1978: 36; Tantu 1979: 45-48]、国際旅客線従業員（事務職および空港労働者）、パン売り、雑貨行商人、タバコ売り（以上西ジャワ出身者）[Hugo 1981b: 207-208]、マドゥラ人の屋台の串焼き売り [Lobarnabal 1973: 104-110]、そしてパダン・レストランの従業員 [Persoon 1982: 133]。これらの観察が示すのは、たとえば、ジャカルタのアイスクリーム売りの総てが中ジャワの特定村の出身者であるということではなく、この村出身のジャカルタ在住者には、アイスクリーム売りが多いということである。求職者、就職斡旋者ともに、家族、親戚、友人という紐帯をフルに活用していること、つまり「連鎖移住」だけでなく、マクドナルドたちのいう「連鎖就職」(chain occupation) [MacDonald and MacDonald 1964: 90] の存在すること

14) 就職斡旋における家族や同郷ネットワークの重要性は、出身地とジャカルタとの距離が遠くなるほど、顕著になると想像される。たとえば、前述の、アトマ・ジャヤ大学が行なったジャカルタ行商人に関する調査結果によると、出身地域ごとの行商品目への特化は、ジャワ島出身者よりも外島出身者に、より顕著である。ただし、一般的に、スマトラ出身者は布地や日用雑貨の行商に、ジャワ出身者は飲食物の行商にといった専門化は認められる [Hawkers in Jakarta Vol. 2 1976: Tables 81-A, 81-B]。

が知られる。こうした紐帯の活用には、就職斡旋者にとっても、たんに家族・友人としての道徳的義務を果たすという意味にとどまらず、気のおけない家族や友人が同業分野で働いていれば、いざという時にも頼りになるといった就職斡旋者にとってのプラスの面も存在するのであろう。¹⁵⁾

8. ジャカルタ到着後の居候先に関する結果から想定できるように、移住民のジャカルタでの居住場所には、なんらかの地理的集中がみられる。もちろん、公務員、銀行員、軍人、警察官のように、官舎や宿舎があてがわれることの多い人たちの間では、こうした集中は必ずしも存在しないかもしれない。しかし、インフォーマル・セクター (informal sector 都市雑業層) に属する人たちの間では、居住地の集中は珍しくない [Hugo 1981b: 214-223]。先のテンプレの調査によっても、任意抽出世帯サンプルおよび下層民サンプルを含む全移住民サンプルのうち、ジャカルタ内の居住場所近くに、同村出身者のまったく住んでいない人は平均約42%であり、ひろい意味での同郷出身者が近所にいない人は27%

15) 1983年に、川元がジャカルタで行なった工場労働者についての調査によれば、女子サンプル50人、男子サンプル73人の大部分（それぞれ78%と44%）が、家族、親戚、同郷の友人より現在の仕事についての情報を得ている。しかし、一方では、女14%、男43%が、職業安定所の紹介によるものである。川元のサンプルのうち親がジャカルタに居住している者（女11人、男48人）は、そのほとんど総てがジャカルタ生まれとみられ、上の計算からは除外した [川元 1985: 表1, 表13]。この結果は、工場など、より組織化された職場における就業形態が、とくに男子の場合、行商その他の都市雑業層におけるそれとは異なる可能性を示唆している。しかし、こうした解釈を受容する前に、川元のサンプルの80%から90%は、現職への採用以前にすでにジャカルタに居住していること、また、サンプルの働く工場は、日系の合弁会社のものであることなどを考慮しなければならない。

にしかすぎない [Temple 1974: 156]。¹⁶⁾ 居住地に関する同様の結果は、在ジャカルタのミナンカバウ [Marzali 1973: 131-133, 135-137] やブギス [Roosmalawati 1979: 116-118] についても観察されている。

9. 同村出身者や家族・親族がジャカルタで比較的固まって居住しているということは、日常生活におけるつきあいにおいても、彼らの間の交流が盛んであることを示唆している。私がジャカルタで知りあったジャワ人やミナンカバウ人のなかには、ジャカルタにキョウダイが何人かいて、1カ月に1度か2度、定期的にキョウダイの誰かの家に家族連れで集まり、食事をともにしたり、あるいはアリサンをすると聞いたことがある。¹⁷⁾ また、これはミナンカバウについての例であるが、たんに結婚式や葬式といった特別な機会に同郷出身者が集まるだけではなく、日常生活においても、日ごろのジャカルタでのつきあいが、同村出身者を中心に形成されていることが報告されている [Kahn 1974: 230; 加藤 1983: 49-51; Persoon 1982: 131-132]。

10. 家族、親族、友人、あるいは同郷出身者間の交流は、なにもジャカルタ在住者の範囲に限られているわけではない。こうした関係・繋がりは、都会の生活空間を越えて、ジャカルタと出身村との間でも密である。交流の形態も、村への仕送り、村からの学費の送金、手紙のやりとり、電話があれば電話での連絡、時には村長のジャカルタ訪問、ジャカ

ルタ在住者の一時帰郷、小学校校舎やモスクの建設といった村の開発計画への資金援助、村人のジャカルター時訪問とさまざまな形をとる。¹⁸⁾ ミナンカバウにいたっては、母系親族の共有田 (harta pusaka) の収穫米の一部が、毎年定期的に、村の親族からジャカルタ在住の親戚のもとに送られてくることすらある [Persoon 1982: 157]。

つまるところ、このような出身地と都市との繋がりがあればこそ、1. の情報・コネの提供に始まり、9. のジャカルタ内での交友関係の場にいたる個々のネットワークの環が一巡・連結され、相互に補強しあうことにもなるのであろう。

以上、ジャカルタ在住地方出身者に関する調査結果を中心に、インフォーマルな繋がり、なかんずく家族、親族、友人、同郷出身者を中心とするネットワーク——以後、親族・同郷ネットワークと呼ぶ——と、地理的移動や都市生活との関係を整理、点検してみた。こうしたネットワークの存在は、私がこれまで検討したデータの示す限り、多くの種族に共通してみられる現象であり、また、その発現はジャカルタのみに限定されない。ジャカルタに関する調査結果ほど幅と奥行きがなく、また多面的でもないが、親族・同郷ネットワークに関する似たような結果は、インドネシアの他の都市、たとえばバンドン [Brady 1975; Bruner 1972; 1974], ヨグヤカルタ [Mantra 1981; Sairan 1982; Yunus 1978],

16) ここでの「同郷」の意味ははっきりしないが、テンプルは District という言葉を使っており、州 (propinsi) の下の県 (kabupaten) を指すのではないかとと思われる。

17) アリサン (arisan) とは無尽講のことで、10人前後で、とくに女性を中心に開かれる。毎月なにがしかの金をプールし、籤引きでこれを受けとる順番を決める。アリサンに関する詳しいことは、C. Geertz [1962] と Papanek [1980] を参照。

18) これらの形態のより詳しいことについては、Bruner [1972: 226], Hugo [1981b: Chap. 7; 1983: 23-29], Jellinek [1978: 144-149], Kahn [1980: 33], Kato [1982: 222-239], 加藤 [1983: 56-57], Lobarnebal [1973: 88-89], Marzali [1973: 145-146], Moir [1978: 48-51], Naim [1979: 215-226], Persoon [1982: 141-142, 145], Roosmalawati [1979: 264-265], Surjo-hardjo [1974: 117], Tantu [1979: 97-111, 158], Temple [1974: 115, 156-158] を参照。

スマラン [Lerman 1983], バリの町 [Boon 1977: 115-118; Geertz 1959: 32-33], ウジュン・パンダン [Abustam 1977; Forbes 1978], メダン [Bruner 1961; 1963; 1972; 1974; Pelly 1983] などについても観察されている。

ネットワークは、自発的結社などと違い、組織化された構造をもたない。にもかかわらず、ネットワークは、その構成員の行動にたいし、愛情、道徳的義務、慣習などに裏打ちされた社会的コントロールを発揮し、ゴシップ、消極的交際、交際拒否などの制裁を加える。ネットワークがもたらす積極的效果（物質的援助、精神的満足感、帰属意識等々）とともに、こうしたコントロールの存在が、都市への地理的移動過程において、ネットワークをインフォーマルながらより実体のあるものとし、また、特定都市や種族を越えて比較的普遍的なもの [Graves and Graves 1974; Graves and Graves 1980; Hugo 1981a] たらしめている源であろう。

普遍性とは別に、ネットワークの変異 (variation) も、将来、考察の対象とされる必要がある。たとえば、親族・同郷ネットワークのひろがりや強さには、インドネシアのなかでも種族によって違いがあると思われる。この点で、ミナンカバウやバタックのような単系制親族制度の社会と、ジャワのような双系制親族制度の社会との比較は、興味深い研究テーマである。

ネットワークのひろがりや強さには、種族的差ばかりでなく、当然、個人差、職業差、社会階層差なども存在しよう。また、同一個人においても、ライフ・サイクルや都市生活への適応サイクルの段階によって、それは変化する。

同様に、ネットワークのひろがり、強さは、歴史的状況によっても左右される。たとえば、ミナンカバウは、1958-1961年に中央政府にたいして反乱を起こし鎮圧されたが、

この時期およびその後数年間は、相互扶助のためのミナンカバウの親族・同郷ネットワークの拡大が目覚ましかった。

親族・同郷ネットワークは、都市の地方出身者にとってのインフォーマル・ネットワークの一つの類型であり、ほかに職場仲間、近所づきあい、学校仲間などによって形成されるネットワークも存在する。両類型間の相対的比重は、個人によっても、あるいは上述のような個人の生活史におけるライフ・サイクル・適応サイクルの段階によっても、そして個人の異なる生活場面（たとえば家庭と職場、あるいは相互扶助活動と経済活動）によってもさまざまである。

けだし、個人、個人史、種族、歴史などを切口とするネットワークの変異の同定は、今後の「都市の種族」研究者にとっての重要な研究課題である。しかし、変異の問題は問題として、所得レベル、工業化段階ともにまだ低く、一方で就職斡旋施設、失業保険、他の社会福祉政策も不整備なインドネシアの現状では、公務員などの一部の例外を除き、農村から都市への移動過程、あるいは都市での生活において、ネットワークの果たす役割が依然として大きいことも事実である。そして、多民族国家インドネシアの現実には、「種族」を内包する親族・同郷ネットワークの意味を、さらに増幅させる結果となっている。

IV 同郷会：ミナンカバウの事例

現在、インドネシアにおける同郷会の名称は、一般にインドネシア語のイカタン (ikatan 繋がり) ないしプルクンプラン (perkumpulan 集まり) という言葉で表現されることが多い。イカタンやプルクンプランのあとには、クルアルガ (keluarga 家族) やワルガ (warga メンバー) という言葉と、出身地の地名がつけられるのがふつうである。たとえば、

プルクンプラン・クルアルガ・シルンカン (Perkumpulan Keluarga Silungkang または略称 P.K.S.) といえ、西スマトラ州にあるシルンカン村出身者の会であり、イカタン・ワルガ・マドゥラ (Ikatan Warga Madura 略称 IWAMADA) といえ、東ジャワ北海岸沖にあるマドゥラ島出身者の会である。¹⁹⁾ これらの名称例が示すように、同郷会は、親族・同郷ネットワークの延長線上にしばしば結成されることが理解できる。

西スマトラを故地とするミナンカバウ族は、昔からムランタウ (merantau 出稼ぎ・移住) 慣行によって知られ、また、同郷会活動の盛んなことによっても有名である。現在ムランタウの最重要目的地となっているジャカルタでは、同郷会活動がとくに盛んで、1970年代初頭の時点で、最低100前後の種々のミナンカバウ同郷会や種族的結社が存在していた。²⁰⁾

- 19) 前者は本稿執筆時に、後者は1973年当時に [Lobarnebal 1973], それぞれジャカルタに現存する (存在した) 同郷会である。同郷会は離合集散が激しく、後者がまだ存在するかどうかは明らかではない。
- 20) スワソノによると、1970年代初頭に在ジャカルタ・西スマトラ州連絡事務所 (Kantor Promosi Pembangunan Daerah Tingkat I Sumatera Barat) に登録されていたミナンカバウ同郷会、種族的結社の数は合計98であった [Swasono 1974: 119, 205-207]。登録は自己申告であり、総ての組織が、州政府のジャカルタ代表部である連絡事務所に登録されているわけではない。ちなみに、『アネカ・ミナン』 (Aneka Minang) という雑誌の1号 (1972年1月発行) から21号 (最終号で、発行推定年は1974年) にかけて、時折自己申告により掲載された「われらが組織の住所」欄 (Alamat2 org. urang awak) には、累計145の各種ミナンカバウ同郷会や種族的結社が、インドネシア全国で数えられた。このうち85がジャカルタに、21がバンドンに、12がパレンバンに存在した。『アネカ・ミナン』は、『バリア・ミナン』 (Varia Minang) とともに、1970年代初頭にジャカルタにおいて出版さ

私は、1980年10月から1981年12月までジャカルタに滞在し調査に従事したが、この時の経験に基づき、ミナンカバウ同郷会の特徴を述べると、概略次のようになる。²¹⁾

同郷会は、上にも述べたように、正式の名称により認知される。ジャワ族の一部上層階層が形成するトゥラ (親族会) が、会のシンボルマークを制定している事例 [Sairan 1982: 55-58, 77], あるいはトバ・バタックの父系氏族のジャカルタでの組織が、氏族の歌を有している事例 [Bruner 1972: 222] が報告されているが、ミナンカバウ同郷会の場合は、このような例はきわめてまれである。キリスト教徒であるトバ・バタック族にとって、讃美

れた雑誌で、主たる対象はミナンカバウ出稼ぎ・移住民である。両誌とも1974年ごろ廃刊となった。『アネカ・ミナン』の発行部数は、創刊者のひとり Nazif Basir によれば、15,000から20,000であった (ジャカルタでの1981年1月7日のインタビューによる)。その後ミナンカバウ出稼ぎ・移住民のために刊行された雑誌として、『ミナンカバウ文化』 (Majalah Kebudayaan Minangkabau) と『ランペイ・ミナン』 (Rampai Minang) がある。ともにジャカルタで出版され、前者は1974年1月の創刊から1980年7月の最終号とみられるものまで14号を数え、後者は1980年1月の創刊号以降、継続出版された形跡はない。

- 21) ジャカルタでの調査は、主として西スマトラの三つの村——ブキティンギ近くのコタ・ガダン (Kota Gadang), ソロツ (Solok) 近くのスリット・アイル, サワルント (Sawahlunto) 近くのシルンカン出身者の同郷会について調査を行なった。これらの村々は、ムランタウ慣行の長い歴史をもち、同郷会もすでにオランダ時代から存在している。スリット・アイルとシルンカンの調査結果の一部については、加藤 [1983; 1986] を参照。上記三つの事例研究のほかに、西スマトラ州政府の地域開発計画局 (BAPPEDA) の協力を得て、州政府の行政チャンネルをとおし、全州のナガリ (nagari 「村」) に、当該ナガリ出身者のムランタウ活動と同郷会活動に関するアンケートを送付した。アンケートの回収率は49%, 259カ村である。

歌に代表される歌は、集団としての重要な感情表現手段の一つであるのにたいし、敬虔なイスラーム教徒であるミナンカバウにとって、歌唱と視覚的シンボル・マークは、それほど重きをおかれないのかもしれない。また、ミナンカバウ同郷会は、あとに述べるように、出身村ごとに結成されるのがふつうで、「故郷の村」という明確な境界とイメージをもった存在が単位であるだけに、組織としての結合のためには、自己識別のための名称設定以外のものを必要としないことも考えられる。

同郷会の結成される場合は、インドネシアのなかでも、同一地方の出身者が数多く集まる大・中都市、それも西スマトラ州外のコスモポリタンな大・中都市が中心である。しかし、オランダ時代は、出稼ぎ先は西スマトラ州(当時はスマトラ西海岸州)内が大多数で、ミナンカバウ同郷会の走りも、州内の都市パダン(1930年の人口は 52,054 [*Volkstelling 1930 Deel IV* 1935: 142])とブキティンギ(1930年の人口は 14,657 [*loc. cit.*])で起こったものと思われる。現在でも、パダンには幾つもの同郷会が存在する。パダン、ブキティンギともに、中国人、バタック族、ジャワ族、かつてはオランダ人などの他種族・他民族人口を抱えていた(抱えている)が、ミナンカバウ文化圏に内包されるこれら都市は、人口の大多数がミナンカバウ族であり、街の日常言語もミナンカバウ語である。²²⁾ こうしたことから、ミナンカバウ同郷会の発生・存続に

は、都市が多種族的(polyethnic)であることもさることながら、村落社会の組織原理、社会規範を欠く都市の状況自体も重要である。²³⁾

同郷会の結成される単位は、ミナンカバウの場合、アダット(adat 慣習、伝統)によって規定され、かつまた行政上の末端機構でもあるナガリ(「村」)ごとであるのが最も一般的である。ただし、将来ともに、この状態が続くかどうかは定かでない。西スマトラ州には、510 ほどのナガリが存在したが、1979 年の中央政府の法令(Undang-Undang No. 5 Tahun 1979 tentang Pemerintahan Desa と呼ばれ、全国一律の施行を目的とする)により、ナガリという単位は行政機構から廃止されることが決定された。新行政機構では、ジョロン(jorong)ないしコロン(korong)と呼ばれるナガリ内の集落が、デサ(des)として最下部の行政単位となった。この法令の実施は、西スマトラ州センサス統計局(Kantor Sensus dan Statistik)の1980年センサスの末端集計単位が、西スマトラ州内の県によりナガリであったりデサであったりするところから、おそらく1980年以降、それとところによっては1982年以降であったろうと思われる。いずれにしても、ミナンカバウ同郷会の単位として最も一般的なナガリは、行政上はもはや存在しないという奇妙な状態が起こっている。新行政機構が、いずれ同郷会の再編成、たとえばデサごとの同郷会の分裂を招来

22) 1930年センサスによれば、パダンおよびブキティンギの全人口にたいするミナンカバウ族の比率は、それぞれ66%と75%であった[*Volkstelling 1930 Deel IV* 1935: 25, 142]。独立後のオランダ人の撤退、中国人の新規流入の停止を考えると、たとえ官僚、軍人、警察官としてのジャワ族の流入を勘案しても、現在のこれら都市のミナンカバウ人口は、オランダ時代よりも比率が高いと思われる。

23) 同郷会ないし種族的結社の形成される場の属性として、多種族的状況を考える場合、たんに都市全体の種族構成だけではなく、都市の特定セクターの種族構成をも考える必要がある。たとえば、ジャワのバンドンやヨグヤカルタは、都市全体としては、高い多種族的状況を示さないかもしれない。しかし、両都市ともに教育施設が集中しており、とくに大学には、インドネシア各地から学生がやってくる。したがって、大学では、同郷会や種族的結社が活発である可能性が存在する。

することになるのかは、今後の興味ある問題である。²⁴⁾

特定都市に在住する同一村（ナガリ）の出身者が少ない時には、全ミナンカバウ、あるいは同一出身県ないし郡ごとに、同郷会が結成されることもある。このような例としては、ジャカルタ近くのタンゲラン（Tangerang）に存在したミナンカバウ出身者全体のための組織「タンゲラン・ミナン全員一致会」（*Persatuan Warga Minang Saijo Tangerang*）、スマトラのパレンバンに存在したパシシール・スラタン県出身者のための組織「パシシール・スラタン家族連合会」（*Ikatan Keluarga Pesisir Selatan* 略称 *I.K.P.S.*）、ジャカルタに存在したアガム（Agam）県・バソ郡出身者のための「バソ郡ならびに近辺地域親睦会」（*Ikatan Kekeluargaan Kecamatan Baso dan Sekitarnya* 略称 *IKBS*）が挙げられる。これらは、いずれも1970年代初頭に実在した組織であるが、現状は不明である。²⁵⁾

同一村からの出稼ぎ・移住民が増加するとともに、村単位の同郷会が形成され、郡、県、州単位の同郷会に変容すると思われる。残念ながら、私はこうした具体例を直接には知らないが、たんに「引算的」変容をするのではなく、二重メンバーシップ、再組織化、自然解散と、時間の流れのなかでいろいろな適応

を遂げるのであろう。前述のチランダックに存在する「われわれ同士」という組織の例でいうと、この組織は1962年に、チランダックのミナンカバウ人口が100人ほどの時に創設されたもので、ミナンカバウ人口が1,000人を越し、また、村レベルの同郷会が幾つか存在するようになった現在（1980年）でも、組織としてのアリスンその他の活動を続けている。メンバーが他の同郷会に所属することは自由で、会はチランダックに住む総てのミナンカバウ人に開放されている。しかし、実際に参加しているのは一部の人たちである。「われわれ同士」のメンバーの核は、全国的なイスラーム組織ムハマディヤのチランダック支部のメンバーでもあり、この組織の比較的長期にわたる存続の秘密も、このあたりにありそうである [Persoon 1982: 156-163]。

前記のバタックに関するブルーナーの研究によれば、メダン、バンドン、ジャカルタのいずれにおいても、父系氏族会は会則を有し、また、会員の名簿の作成や会費の徴収を行っているものが多い [Bruner 1972: 214, 216-218, 220-222]。ジャカルタに存在する一父系氏族会の例では、会員証の発行すらみられる [ibid.: 221]。ジャワ族のトゥラにおいても、会則と会費の制定（会費の徴収は現実には難しい）は一般的である [Sairan 1982: 54-55, 63-82]。ミナンカバウ同郷会の場合は、会の規約をもつものは少なく、会員証や住所録を発行しているものはさらに少ない。しかし、バタックやジャワの例と同じように、無給の会長、書記、会計掛などの執行部は存在する。これら執行部は、選挙ないし推薦方式で会長を決定し、のちに会長がほかの執行部メンバーを任命するケースが多い。会費徴収を制定している事例はまずなく、たとえ制定していても、実際には強制力がないため徴収不可能である。会の運営費は、執行部役員のもち出しと、篤志家メンバーの寄付に頼らざ

24) ナガリの廃止に対する住民の抗議に鑑み、西スマトラ州政府は、アダット上のナガリの地位を守るため、1983年末に州令を發布し、アダットに関する問題、とくに土地問題は、ナガリを単位として解決するよう奨励し、そのための機関としてクラパタン・アダット・ナガリ（*Kerapatan Adat Nagari* ナガリ・アダット会議）の制定を決定した [Peraturan Daerah Propinsi 1983]。この会議の構成員はプンフル（*penghulu* 母系氏族長）たちで、デサの役人たちは含まれない。

25) ここに挙げた同郷会については、*Aneka Minang*, No. 2, 1972; No. 3, 1972; No. 14, ca. 1973 の「われらが組織の住所」欄を参照。

るをえない。

同郷会のメンバーとなるのは、出自により西スマトラの特定村落・特定地域を出身地とする人々で、特別な手続や審査を経ずに、当該都市に到着後は、家族ともども自動的に同郷会のメンバーとみなされる。他村・他種族出身者も、婚姻により伴侶の同郷会のメンバーとみなされるが、姻戚はこれに含まれない。ミナンカバウは母系制の社会であり、父親の出身村・出身種族にかかわらず、父親と子供は母親の同郷会に属する。また、母親が他村・他種族出身者の場合でも、現在では、子供は母親ともども父親の同郷会のメンバーとして（も）受け入れられる。したがって、他村出身者同士のミナンカバウ夫婦の場合、同時に二つの同郷会に属している状況も起こりうる。

ミナンカバウ社会では伝統的には村内婚が規範であり、他村・他種族出身者が、事実上 (*de facto*) はともかく、一般的な了解として、伴侶、とくに夫の同郷会のメンバーとして（も）受け入れられるようになったのは、ここ15年から20年ほどの間のことである。村外婚・種族外婚の数は、いまだ多くはないが都市では着実に増えており [加藤 1986]、それだけ社会的にも受容されるようになったということである。

ブルーナーによると、メダンのトバ・パタックの父系氏族会の例では、氏族会への入会に際して、本人の入会申請および入会金の支払いが必要とされるという [Bruner 1972: 214]。ミナンカバウの同郷会について、このような事例は私の知る限り存在しないに等しい。上に述べたように、同郷会への入会は自動的であり、入会に際して意識的な決断ないし行動がとられることはない。この意味で、“入会”、“会員”、“メンバー”といった用語、あるいは“自発的結社”としての同郷会の性格づけは、常に引用符つきで理解されるべき

である。

同郷会メンバーの間には、当然のことながら、同郷会活動に積極的な人もいれば、消極的な人もいる。しかし、メンバーがたとえ同郷会活動の参加に不活発であっても、フォーマルな制裁を加えられることはない。ただし、同郷会メンバーの冠婚葬祭などにしばしば義理を欠く時には、ゴシップによる中傷、場合によっては、自己の冠婚葬祭への他メンバーの不参加、あるいは非協力的参加といったインフォーマルな制裁を受ける。同郷会への参加が自動的であるということは、逆にいえば参加するのがあたり前であると考えられていることであり、冠婚葬祭といった最低限のつきあいは、総てのメンバーに期待されている。

V ミナンカバウ同郷会の活動分野

西スマトラ・ソロツ県のスリット・アイル村出身者は、ミナンカバウ族の間にあっても、とくに出嫁ぎ好きの人々として知られる。彼らの同郷会組織「スリット・アイル一致団結」(Sulit Air Sepakat 略称 SAS) は、インドネシア全国の主要都市に、同名の同郷会の支部をもつ。SAS は、また、ミナンカバウ同郷会のなかでも、定款と会則を定めている珍しい事例である。序、そして同郷会の名称、設立年月、設置場所に関する2条項のあと、定款は次のように続く。

原則と性格

第3条

SAS は、イスラームおよびミナンカバウの慣習と伝統に則り、パンチャシラ (Pancasila インドネシアの独立5原則) に立脚した親睦を旨とする組織である。

目 的

第4条

1. 社会(福祉), 教育, 経済, その他の分野において, 出稼ぎ・移住地におけるスリット・アイル社会(の人々)の生活を向上させる。
2. 民族(bangsa)および祖国(tanah air)の開発の枠に沿い, スリット・アイル村の開発を援助する。
3. 組織としての活動を行うにあたり, 「家族」(kekeluargaan)としての一体感と統一を養い, 全員一致の協同を目指し, さらに責任感を培う。

活動

第5条

上記の目的を達成するため,

- a. スリット・アイル人(warga Sulit Air)の社会文化, 経済, 教育, 宗教, その他必要とみなされる事柄に関し, その水準を高め, 改善するよう努力する。
- b. (国の)法律の原則・目的に背くことのない範囲で, 社会(事業)協会(yayasan sosial), 協同組合(koperasi)を設立し, あるいはその他の努力を遂行する [Buku Petunjuk Musyawarah SAS Ke VII 1981: 13]。

定款の残りの部分には, 会員, 執行部組織の構成, 執行部の任期, 同郷会総会, 歳入・財源, 同郷会の解散・再編成などについての条項が並ぶ。定款に続く会則では, 会員の資格と義務, 財務, 同郷会支部の設置, 中央・地区・支部にわたる各レベルの同郷会執行部の構成, および同郷会総会などに関する細則が定められている [ibid.: 13-23]。会則では, SASの会員資格を有する者は, 「出稼ぎ・移住地に居住するスリット・アイル人またはスリット・アイル人と結婚している者で, (スリット・アイル人の場合は) 18歳以上ないしすでに結婚している者」とされている。入会は, この条件を満たす限り自動的であり, 例外は, 最下部の同郷会執行部ないし入会資格

保有当事者が, 入会拒否を決定した場合である(会則第2条第1項)。結婚前の青少年は, 「スリット・アイル青年・学生連合」(Ikatan Pemuda Pelajar Sulit Air 略称 IPPSA)に属する。しかし, 子供に関する規定はSASの定款にはみあたらない。定款には, 会員証の発行, 入会金, 月例会費の徴収も明記されているが(会則第2条第2項, 同第7条第2, 3項), 私のジャカルタでの経験では, これは現実には実施されていない。

上記の定款は, 定款という性格上, 全体として抽象的であり表現が硬い。しかし, ミナンカバウ同郷会が一般的に従事している活動分野をよく反映している。これらをまとめると, 次の五つに整理できる。

1. 同郷会メンバーの相互扶助

都市への新来者の面倒をみ, メンバーが火事, 交通事故, 病気などの不幸に見舞われた時には援助の手を差し延べ, そしてとくに死去に際しては, 弔問および葬儀の手助けをし, 必要により経済的援助をする。同郷会によっては, 弔問時の見舞金の額を定めているところもある。結婚式も, 料理の手伝い, 食事の給仕, 伝統に則った婚約時からの式次第のとりまとめなど, 相互扶助の場である。同郷会によっては, 婦人部会が結婚式の衣装や祝宴のための食器を保有していることもある [Persoon 1982: 166]。現在, 仕出し料理, 集会用のホール, 宴会場つきホテルなどが存在する大都市では, 一部富裕ホワイトカラー, 政府要職者の間で, 結婚披露宴のため, これらの便を利用する人たちも出てきている。ただし, こうした場合でも, 相互扶助が霧消してしまうわけではない。

2. 同郷会メンバーの相互交流

同郷会メンバーの交流を, 偶然の機会の遭遇や, 近しい親族間の狭い交流の域からひろげるため, 出あい場を恒常化する努力がなされている。この目的で, 月例のアリサンと

プンガジアン (pengajian イスラームの説教会) が、富裕メンバーの自宅をもちまわりで開かれていることが多い。参加は自発的意思による。アリサンやプンガジアンが盛んになってくるのは、1970 年代初頭からのことで、これは1960年代後半から顕著になる男子単身出稼ぎから核家族による移住への、地理的移動形態の変容と関係している。アリサン、プンガジアンともに積極的な参加者は、主婦として自由時間を豊富にもち、一般に男性より信仰心のあつい女性で、また、プンガジアンには、子供や青少年の信仰心を育てる役目も期待されている。

同郷会に青年部会が組織化されている場合には、とくに交流活動が重要で、ピクニックやスポーツ大会の開催を通じ、同郷の青年男女が出あい、知りあうよう配慮がなされている。こうした集いは、若い男女にとって、将来の伴侶をみつける機会でもある。

同郷人が地理的に拡散・居住し、またお互いに忙しい大都市では、結婚式、そしてとくに葬儀は、相互扶助の場だけでなく、同じ大都市に居住する同郷人の多くが、一同に会する交流の場でもある。結婚式は、さらに、自分たちのアダットを学び、アダットに則った儀式を鑑賞する場であり、また葬儀は、大袈裟に言えば、運命共同体としての同郷会の存在を再確認する場でもある。

同郷会にとって、相互交流の場として最も大事なものに、1年に1度の、断食月のおわりを画するイスラームの聖祭、レバランがある。断食月明け後の1週間ほどは、家族、親族、同郷会、青年部会と種々のレベルにおいて、日を違えて繰り返しお祝いの集いがもたれる。ジャカルタにおけるように、同村出身者が多いため同郷会の構成規模が大きいところでは、出自母系氏族ごとないしジャカルタ内の居住地区ごとに、あるいは出身者に商人の多い村では、ジャカルタの中心的市場

(pasar) の地域ごとに、ふつう同郷会は支部に分かれている。こうした場合には、月例の集いは支部ごとに組織され、同郷会全体のフォーマルな集いは、レバラン時のみに限られている。けだし、同郷会の肥大化のなかで同郷会全体の結束力をいかに保持していくかは、ジャカルタのミナンカバウ同郷会にとっての今後の重要課題であろう。

イスラームおよびアダットと、同郷会の交流活動との関係についていえば、プンガジアン、レバランのように、宗教上の集団活動がスケジュール化されやすいのに対し、アダットは日常生活や通過儀礼に密接に関わるとはいえず、その活動は、集団レベルの活動としてルーティン化しにくい。この意味で、同郷会の相互交流においては、アダットより宗教が一般に重要性を帯びてくるように思われる。

3. “道具的” (instrumental) 活動の促進

相互交流のような“表出的” (expressive) 活動ではなく、メンバーの生業活動や子弟の教育のレベル・アップなど、目的志向・達成志向の活動で、具体的には、奨学基金の設立 (メダンのトバ・バタックの一父系氏族会では実践されている [Bruner 1972: 214])、あるいはメンバーへ商業資本を融通するための貸付基金の設立などが考えられる。ジャワ貴族の親族会 (トゥラ) の場合、幼稚園を運営している事例も認められているが [Sairan 1982: 66]、ミナンカバウの間でこうした例を聞いたことはない。

ミナンカバウの間で実際によくみられるのは、信用組合 (koperasi) 活動である。金持ち同郷会メンバーの寄付金や、信用組合員の月会費をもとに組合資金を形成し、商売の資本などを低利で希望組合員に貸し与える。組合員となるのは、同郷会メンバーのうちの希望者だけである。信用組合活動は、商人の多い同郷会では盛んであるが、貸金の焦げつきから組合はよく破産する。一般に、教育のレベ

ル・アップを含む“道具的”活動は、利益が主として個人に還元されるものゆえ、同郷会としての組織化が難しく、実現されたとしても成功したという例はあまり聞かない。

4. 出身村との関係の緊密化

村との繋がりを緊密にするため、月例会において村の主だった出来事を披露すること、都市に一時訪問でやってきた村長、村の有力者、長老たちを月例会へ招待し、彼らの話を拝聴すること、都市在住の若者たちのために、村の歴史や宗教・文化的伝統を聞く機会を設けること、などの活動が行われている。2、3年に1度、レバラン時に、「ともに帰ろう」(pulang basamo)という呼びかけのもと、都市在住者、それもとくに青年男女が一時帰郷するよう、バスなどをチャーターして、村の一時訪問の便宜を計っているところもある。

同様の目的で、同郷会によっては数年に1度、インドネシア各地に存在する同郷会支部の総会を、出身村で開いている事例が、数は少ないが存在する。同郷会総会はレバランにあわせて開かれ、各地の同郷会支部は代表を送るが、それ以外にも多くの人が一時的帰郷する。なるべく多くの人が一時的帰郷し、村との直接交流が促進されるようにというのが、その目的の一つである。

上の活動が、村との関係における同郷会の“表出的”活動だとすれば、“道具的”活動も同郷会には行なっている。村の開発プロジェクトの援助、たとえばモスクの建設や小学校校舎の改築工事の援助、時にはイスラーム学校の維持費の定期的拠出などがそれである。こうした援助は、村の特定プロジェクトのため、同郷会としてメンバーに寄付金を募り送金することもある。金持ち会員が、独自に大口寄付をすることもある。後者は、同郷会としての活動ではないが、こうした大口寄付者は、同郷会コミュニティにおける自己の評判にきわめて敏感であり、彼らの個人的行

為も、同郷会が存在するという事実と切り離して考えることはできない。場合によっては、金持ちが、他の金持ちに負けまいと、競争で村の開発プロジェクトに寄付することすらある。開発プロジェクトとは別に、毎年レバランのあとに、ザカット(zakat イスラーム教の一種の宗教税)を同郷会メンバーから集め、村全体の必要経費にあてるため、送金しているケースもみられる。

村へのこうした財政的援助は、当然のことながら、村落行政に対する同郷会の関心や干渉行為を招来し、村長選挙への介入や、場合によっては、同郷会メンバーのひとりを、村内在住者の同意のもと、村長として送り込むこともありうる。

5. 同郷会支部間の交流・連携

出稼ぎ・移住の盛んな村では、同郷会がインドネシアの複数都市に存在することもあり、こうした場合、これら同郷会支部間の交流・連携が計られることがある。具体的には、前述の、出身村での数年に1度の全インドネシア同郷会総会の開催、同郷会総会における村の開発プロジェクトの共同設定、時には同一出身村の同郷会名称の統一も行われている。こうした事例では、通常ジャカルタに全国の同郷会の中央執行部がおかれており、必要に応じて、各地の同郷会支部との関係調整を計っている。このような活動をとおして、全国に散らばる同郷会と出身村とを包括する一つのコミュニティ感覚が醸成され、また、各地の同郷会の間で同郷会組織の充実化をめぐる競争や、村の開発援助にたいする競争が生まれたりもする。

1. から 5. までの活動を促進するため、同郷会によっては、都市に集会のための家屋を所有している。ただし、事例の数は少ない。これら同郷会の集会所は、ほとんどの場合、篤志家の金銭ないし家屋の寄付により実現されている。

上と同様の目的で、同郷会の雑誌を出版しているところもある。特定都市の同郷会のために出版されている雑誌もあれば、同郷会の全国組織のために出版されているものもある。雑誌に盛られる内容は、同郷会の活動、ミナンカバウや出身村のアダットに関する話、イスラームの教え、村のニュース、同郷会メンバーの近況、詩、随想などである。雑誌は無料で、主だった同郷会メンバーに配布される。たとえ特定都市の同郷会の雑誌であっても、在村の有力者に送付されるのはもちろんのこと、他都市の同郷会支部指導者にも送付される。

雑誌出版の財源は、篤志家メンバーの寄付金によって賄われ、有志の無給スタッフが編集・出版に従事している。こうした脆弱な基盤のため、同郷会雑誌の出版は、資金・労力の欠乏に常に悩まされており、5年、10年と連続して出版されるのはまれである。一般に、同郷会執行部は、その交替ごとに同郷会雑誌の出版を「公約」の一つとして掲げるが、任期（通常2、3年）半ば、再任期半ばに、雑誌は休刊に追い込まれることが多い。

ミナンカバウ同郷会の活動を概観してきたが、おわりにあたり、次の4点に留意したい。

1) ミナンカバウ族は、昔から出稼ぎ・移住の盛んな種族としてインドネシアでは知られているが、この伝統には西スマトラのなかでも地域差があり、したがって西スマトラの総ての村、総ての地域が、同郷会をもっているわけではない。また、たとえ同郷会が存在しても、その組織化の度合いはまちまちである。

2) 同郷会の組織化の度合いを計るバロメーターとして、(1)同郷会名称の制定、(2)同郷会執行部の存在、(3)アリスンやプンガジアン（注）の恒常的開催、(4)レバラン時の共餐・共同祝賀、(5)同郷会規約の制定、(6)間歇的にもせよ同郷会雑誌の出版、(7)信用組合の組織化、(8)集会所の所有、(9)村に送るためのザカットの

徴収、(10)村の開発プロジェクトへの組織的貢献、(11)「ともに帰ろう」という集団一時帰郷の実現、(12)全国同郷会総会の開催、などが考えられる。このうち、(1)から(8)までは、主として同郷会の内部の組織化に、(9)から(12)までは、同郷会と、出身村あるいは他の同郷会との関係の組織化に関わるものである。

3) 上のバロメーターのうち、(1)から(4)までは、その実現の程度に差はあるとはいっても、現在ほとんど総ての同郷会に一般的にみられる。(3)と(4)は、たとえ同郷会が存在していない場合でも、当該都市の同村出身者のネットワークのなかで、しばしば観察することができる。(5)と(8)は、一度実現されれば形として残るものではあるが、その内容、運営のされかたは、時間の経過、執行部の指導力などによりいろいろである。(6)と(7)、そして(9)から(12)は、これらの必要性の度合い、インドネシアの一般的経済状態・政治状態、同郷会執行部の指導性、同郷会メンバーの参与の程度によって、その実現が左右される。また、一度実現されたからといって、これがその後とも継続される保証はない。

4) 同郷会の構成される単位によって、同郷会の五つの活動分野は、より限定されたものとなる。ミナンカバウ出身者全体、あるいは西スマトラの出身県ないし出身郡をもとに構成された同郷会は、1.の相互扶助や2.のメンバーの相互交流を中心に運営されており、3.“道具的”活動、4.出身村・出身地域との関係の緊密化、5.同郷会支部間の連携（支部関係そのものが実在しない）は存在しない。1.、2.においても、同郷会規約の制定、雑誌の出版、信用組合の設置、集会所の確保などはみられない。

おわりに

本稿では、インドネシアの都市における種

族結合形態のうち、ネットワークと同郷会について概観したが、それでは両者の関係はどのように捉えたらよいのであろうか。

親族・同郷ネットワークの構成員は、多くの場合、同一種族のメンバーであると考えられる。²⁶⁾ さらに、このネットワークは、種族的に同質な故郷とコスモポリタンな都市の両者を貫いて形成されている。この意味において、潜在的にせよ顕在的にせよ、「種族」は常にネットワークに内包されているといえよう。

ネットワークと同郷会を比較すると、両者の間に重複する部分が多いことに気がつく。同郷会の活動として挙げた五つの分野をとってみても、相互扶助、相互交流はネットワークにも存在する。それも近しい親族の間柄に限定されず、たとえ同郷会が組織されていない場合でも、同一都市に住む同郷出身者が、レバラン時に共餐・共同祝賀の会を開き、葬儀時に助けあうことがしばしば観察される。親族への商業資本の貸与、出身村への一時帰郷、村の開発プロジェクトへの援助、あるいは他都市の親族との交流も、ネットワークにとって決して無縁のものではない。ネットワークと同郷会を、一つの延長線上に考えると理解しやすい所以である。

それでは、同じような機能を担うにもかかわらず、同郷会が発生する基盤はなんであろうか。あるいは、逆に、ネットワークが同郷会に発展しないとしたら、それはなぜである

うか。詳しい論議は将来に譲るとして、ミナンカバウ同郷会の歴史的発展過程を参考にすると、同郷会発生基盤として六つの前提ないし要因が考えられる。

1) 故郷の社会における慣習・伝統 —— 特定種族の文化のなかに、同郷会形成を促進するような要素が存在するかどうか。ミナンカバウの場合、母系制によるところの母方親族の結束の強さや、アダット上の村落「ナガリ」の、ミナンカバウ人の帰属意識における重要性が挙げられる。

2) 都市における地位 —— 特定種族が、特定の都市、大きくはインドネシア社会において、どのような社会・経済・政治的地位を占めているか。ミナンカバウの場合、インドネシアのなかでは少数種族であるが、移住が盛んで都市に多く住み、オランダ時代より教育程度の高さ、経済活動に優れていることから高い自負心を持ち、ジャワ族を含む他種族にたいする対抗意識が強い。

3) 移住民社会の要請 —— 都市において、ネットワークを越えたより大きな帰属意識、たとえばミナンカバウ人、何々村出身者といった帰属意識の準拠枠を実体化し、あるいは相互交流、相互扶助の輪を拡大・組織化する必要があるか。相互扶助のなかでは、とくに突発的不幸、なにかんづく出稼ぎ先での死への対策が、“移住民社会の要請”としての同郷会形成の直接の切っかけとなることが多い。“移住民社会の要請”は、全ミナンカバウのための同郷会、県、郡、村ごとの同郷会と、総てのレベルにおいて観察される。

4) 出身地域の要請 —— 出稼ぎ・移住民に資金援助を求めるような開発・発展計画が地元存在するかどうか。開発・発展計画は、宗教施設、教育施設の充実化が主体で、植民地時代は、一部で村レベルでのオランダ語学校の建設が実践されたりもした。具体的には、資金援助を求めるにあたって出稼ぎ人の

26) ジャカルタのミナンカバウの例をみる限り、近年種族外婚の数も徐々に増えつつある [加藤 1986]。しかし、ブルーナーも述べているように、これは必ずしも、アダットや種族意識のうへで“混血”(mestizo)の誕生を意味しない [Bruner 1974: 273]。ミナンカバウの例でいえば、種族外婚における結婚相手の大多数はジャワ人ないしスンダ人で、私の観察では、アダットの面で柔軟な彼らは、ミナンカバウ社会のなかに組み入れられ、子供もミナンカバウ人として育てられる傾向にある。

愛郷心に訴えかけ、同郷会の結成を呼びかける。直接の呼びかけ人は、通常出稼ぎ人有志である。“出身地域の要請”は、村ごとの同郷会形成の契機として重要であり、村レベル以上の同郷会では減多に観察されない。

5) 歴史的背景——同郷会の形成を促進するような歴史的背景が、存在するかどうか。ミナンカバウ同郷会の歴史的発展を振り返ると、オランダ植民地時代の1920年代-1930年代と、独立後の1960年代-1970年代との二つのピークが存在する。1920年代-1930年代は、いわば「アソシエーションの時代」であり、蘭領東インドの各地で、民族主義団体、宗教組織、教育団体が結成された。この時代に、同郷会も多く創設されている。1958-1961年に、中央政府に反乱（PRRI 事件と呼ばれる）を起こし破れたミナンカバウにとって、1960年代-1970年代は、反乱の失敗によって失った種族としての誇りを回復し、また、愛郷心の覚醒が著しかった時代である。まず、1965年に、反乱対象のシンボリック存在であったスカルノ大統領が失墜し、翌1966年には、中央政府軍の“占領統治”のかわりにハルン・ザイン（Harun Zain）が、地元出身の民間人として西スマトラ州知事に任命された。反乱後中央政府によりないがしろにされた地元の開発を押し進めるべく、ハルン・ザインが、ミナンカバウ出稼ぎ・移住民に故郷への経済的援助を訴えたのも、この時代である。このように、特定の歴史的状況も、同郷会形成に影響を及ぼす。

6) リーダーシップ——1)から5)までの要因を踏まえ、同郷会の形成を実現させるリーダーシップが存在するかどうか。1)から5)までは、いわば同郷会形成のための一般的背景であり、実際に同郷会が形成されるためには、同郷人の間で中心的に組織化の活動をする人がいなければならない。リーダーの特質として人々がよく挙げるのは、都市移住の経

験が長く、経済的に豊かで宗教心があつく、同郷移住民社会のなかで尊敬され、人の面倒見がよく、かつ出身地域へのコミットメントの強い人である。

ネットワークと同郷会は、しばしば同じような機能を果たし、発生的にも同一線上に位置している。それだけに、たとえ同郷会が形成されても、時間の経過とともに同郷会が名目だけの存在となり、実質的にはネットワークに非組織化される可能性も常に存在する。よくいえば柔軟、わるくいえば不安定、それが同郷会の特徴である。ネットワークと同郷会の関係は、政治、経済を含む通時的背景を視野に入れつつ、たえず流動的に考えられるべきである。

参 考 文 献

- Abustam, Muh. Idrus. 1977. *Tukang Sepatu Toraja di Ujung Pandang: Suatu Studi mengenai Proses Perpindahan dan Penyesuaian Cara Hidup di Kota*. *Berita Antropologi* 9 (32-33): 50-57.
- Aldrich, Brian G. 1981. *Formal Neighborhood Social Organization in Five Southeast Asian Cities*. In *Volunteers, Voluntary Associations and Development*, edited by David Horton Smith and Frederick Elkin. Leiden: E. J. Brill.
- Amali, Jurhan. 1970. *Masyarakat Gorontalo di Tandjung Priok Djakarta*. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Boon, James A. 1977. *The Anthropological Romance of Bali 1957-1972: Dynamic Perspectives in Marriage & Caste, Politics & Religion*. London: Cambridge University Press.
- Brady, Mary Thérèse. 1975. *Life Styles in an Indonesian City: A Study of Factory Workers in Bandung, West Java*. Unpublished M. A. Thesis. Department of Political Science, University of Melbourne.
- Bruner, Edward M. 1959. *The Toba Batak Village*. In *Local, Ethnic, and National Loyalties in Village Indonesia: A Symposium*,

- edited by G. William Skinner. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies.
- . 1961. Urbanization and Ethnic Identity in North Sumatra. *American Anthropologist* 63 (3): 508–521.
- . 1963. Medan: The Role of Kinship in an Indonesian City. In *Pacific Port Towns and Cities*, edited by Alexander Spoehr. Honolulu: Bishop Museum Press.
- . 1970. Progress Report of SEADAG Project Ethnic Group Relations in an Indonesian City. (Mimeographed)
- . 1972. Batak Ethnic Associations in Three Indonesian Cities. *Southwestern Journal of Anthropology* 28 (3): 207–229.
- . 1974. The Expression of Ethnicity in Indonesia. In *Urban Anthropology*, edited by Abner Cohen. London: Tavistock Publications.
- Buku Petunjuk Musyawarah SAS Ke VII. 1981. Jakarta: Panitia Musyawarah Besar Keluarga Sulit Air Sepakat Ke VII.
- Castles, Lance. 1967. The Ethnic Profile of Djakarta. *Indonesia* 3 (April): 153–204.
- . 1972. The Political Life of a Sumatran Residency: Tapanuli 1915–1940. Unpublished Ph. D. Dissertation. Yale University.
- Forbes, Dean. 1978. Urban-Rural Interdependence: The Trishaw Riders of Ujung Pandang. In *Food, Shelter and Transport in Southeast Asia and the Pacific*, edited by P. J. Rimmer, D. W. Drakakis-Smith and T. G. McGee. Canberra: Research School of Pacific Studies, the Australian National University.
- Geertz, Clifford. 1962. The Rotating Credit Association: A “Middle Rung” in Development. *Economic Development and Cultural Change* 10 (3): 241–263.
- Geertz, Hildred. 1959. The Balinese Village. In *Local, Ethnic, and National Loyalties in Village Indonesia: A Symposium*, edited by G. William Skinner. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies.
- . 1967. Indonesian Cultures and Communities. In *Indonesia*, edited by Ruth T. McVey. New Haven: Human Relations Area Files.
- Goldstein, Sidney. 1978. Circulation in the Context of Total Mobility in Southeast Asia. Papers of the East-West Population Institute No. 53. Honolulu: East-West Center.
- Graves, Nancy B.; and Graves, Theodore D. 1974. Adaptive Strategies in Urban Migration. *Annual Review of Anthropology Volume 3*, edited by Bernard J. Siegel et al. Palo Alto: Annual Review Inc.
- Graves, Theodore D.; and Graves, Nancy B. 1980. Kinship Ties and the Preferred Adaptive Strategies of Urban Migrants. In *The Versatility of Kinship*, edited by Linda S. Cordell and Stephen Beckerman. New York: Academic Press.
- Hawkers in Jakarta Volume 1: Literature Study and Hawkers Sample Survey*. 1976. Jakarta: Pusat Penelitian Atma Jaya.
- Hawkers in Jakarta Volume 2: Appendices*. 1976. Jakarta: Pusat Penelitian Atma Jaya.
- Horikoshi, Hiroko. 1976. A Traditional Leader in a Time of Change: The “Kijaji” and “Ulama” in West Java. Unpublished Ph. D. Dissertation. University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Hugo, Graeme J. 1981a. Village-Community Ties, Village Norms, and Ethnic and Social Networks: A Review of Evidence from the Third World. In *Migration Decision Making: Multidisciplinary Approaches to Micro-level Studies in Developed and Developing Countries*, edited by Gordon F. De Jong and Robert W. Gardner. New York: Pergamon Press.
- . 1981b. *Population Mobility in West Java*. Second Ed. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- . 1981c. Levels, Trends and Patterns of Urbanization. In *Migration, Urbanization and Development in Indonesia*. Bangkok: ESCAP.
- . 1982. Circular Migration in Indonesia. *Population and Development Review* 8 (March): 59–83.
- . 1983. Population Mobility and Wealth Transfer in Indonesia and Other Third World Societies. Papers of the East-West Population Institute No. 87. Honolulu: East-West Center.
- Jakarta dalam Angka*. 1980. Jakarta: Kantor Sensus dan Statistik D. K. I. Jakarta.

- Jellinek, Lea. 1978. Circular Migration and the Pondok System: A Case Study of Ice-Cream Traders in Jakarta. In *Food, Shelter and Transport in Southeast Asia and the Pacific*, edited by P. J. Rimmer, D. W. Drakakis-Smith and T.G. McGee. Canberra: Research School of Pacific Studies, the Australian National University.
- Kahn, Joel S. 1974. Economic Integration and the Peasant Economy: The Minangkabau (Indonesian) Blacksmiths. Unpublished Ph. D. Dissertation. University of London.
- . 1980. *Minangkabau Social Formations: Indonesian Peasants and the World-Economy*. London: Cambridge University Press.
- . 1982. Ideology and Social Structure in Indonesia. In *Interpreting Indonesian Politics: Thirteen Contributions to the Debate*, edited by Benedict Anderson and Audrey Kahin. Ithaca, N. Y.: Cornell Modern Indonesia Project.
- Kato, Tsuyoshi. 1982. *Matriliney and Migration: Evolving Minangkabau Traditions in Indonesia*. Ithaca, N. Y.: Cornell University Press.
- 加藤 剛. 1983. 「都市と移住民：ジャカルタ在住ミナンカバウの事例」『東南アジア研究』21(1)：47-61.
- . 1986. 「都市のなかの『むら』：ジャカルタにみる婚姻形態」『東南アジア世界の構造と変容』石井米雄(編). 東京：創文社.
- 川元岩夫. 1985. 「ジャワでの都市部への人口移動の背景と属性」『東南アジア研究』23(1)：44-60.
- Legge, J. D. 1964. *Indonesia*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall.
- Lerman, Charles. 1983. Sex-Differential Patterns of Circular Migration: A Case Study of Semarang, Indonesia. *Peasant Studies* 10 (4): 251-269.
- Lobarnabal, Sudja'i Zak. 1973. Pedagang Sate Madura di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Logsdon, Martha Gay. 1974. Neighborhood Organization in Jakarta. *Indonesia* 18 (October): 53-70.
- MacDonald, John S.; and MacDonald, Leatrice D. 1964. Chain Migration, Ethnic Neighborhood Formation, and Social Networks. *The Milbank Memorial Fund Quarterly* 42 (1): 82-97.
- Mantra, Ida Bagus. 1981. *Population Movement in Wet Rice Communities: A Case Study of Two Dukuh in Yogyakarta Special Region*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Marzali, Amri. 1973. Orang Silungkang di Jakarta: Latar Belakang dan Fungsi Konflik dalam Sistem Kekerabatan Mereka. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra dan Kebudayaan, Universitas Gadjah Mada.
- McGee, T. G.; and Yeung, Y. M. 1977. *Hawkers in Southeast Asian Cities: Planning for the Bazaar Economy*. Ottawa: International Development Research Centre.
- Mertens, Walter. 1976. Jakarta, A Country in a City: A Demographic Introduction to Jakarta. *Majalah Demografi Indonesia* 3 (6): 50-109.
- Moir, Hazel. 1978. *Jakarta Informal Sector*. Jakarta: LEKNAS-LIPI.
- Muflich, Ayip. 1979. Mardy Pelindung Gang (Suatu Studi Kasus). Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Ilmu-Ilmu Sosial, Universitas Indonesia.
- Naim, Mochtar. 1979. *Merantau: Pola Migrasi Suku Minangkabau*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Pabel, Moh. Noer. 1978. Response Pengemudi Becak terhadap Peraturan Daerah Bebas Becak. Unpublished Research Report. Jakarta: Pusat Latihan Penelitian Ilmu-Ilmu Sosial Jakarta.
- Pandjaitan, Nurmala Kartini. 1977. Kegiatan Dagang Inang-Inang: Kedudukan dan Perannya dalam Keluarga dan Masyarakat Batak Toba di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Papanek, Hanna. 1980. Arisan: Perkumpulan Wanita Tidak Resmi untuk Tabungan dan Pergaulan. In *Wanita Kota Jakarta: Kehidupan Keluarga dan Keluarga Berencana*, edited by Julfita Rahardjo et al. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Pelly, Usman. 1983. Urban Migration and Adaptation in Indonesia: A Case Study of

- Minangkabau and Mandailing Batak Migrants in Medan, North Sumatra. Unpublished Ph. D. Dissertation. University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Penduduk Indonesia 1980 Menurut Propinsi dan Kabupaten/Kotamadya*. 1981. Seri L No. 2. Jakarta: Biro Pusat Statistik.
- Peraturan Daerah Propinsi Daerah Tingkat I Sumatera Barat Nomor 13 Tahun 1983 Tentang Nagari Sebagai Kesatuan Masyarakat Hukum Adat Dalam Propinsi Daerah Tingkat I Sumatera Barat*. 1983. Padang: Biro Bina Pemerintahan Desa Kantor Gubernur KDH TK. I Sumatera Barat.
- Persoon, Gerard. 1982. *Wij met Elkaar: De Minangkabau in Jakarta*. Leiden: Instituut voor Culturele Antropologie en Sociologie der Niet-Westerse Volken.
- Roosmalawati. 1979. Migrasi Orang Bugis ke Jakarta: Suatu Pendekatan Antropologis mengenai Masalah Pola Perpindahan Orang-Orang Bugis keluar Daerah Asalnya. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Sairan, Sjafrî. 1982. *Javanese Trah: Kin-Based Social Organization*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Salmon, Claudine; and Lombard, Denys. 1977. *Les Chinois de Jakarta: Temples et Vie Collective; The Chinese of Jakarta: Temples and Communal Life*. Paris: Association Archipel.
- Sis, Maulud Tumenggung. 1970. Mapalus Orang-Orang Minahasa di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Skinner, G. William. 1959. The Nature of Loyalties in Rural Indonesia. In *Local, Ethnic, and National Loyalties in Village Indonesia: A Symposium*, edited by G. William Skinner. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies.
- Speare, Alden, Jr. 1975. Interpreting the Migration Data from the 1971 Census. *Majalah Demografi Indonesia* 2 (3): 66-85.
- Suharso; Speare, Alden, Jr.; Redmana, Han R.; and Husin, Imron. 1976. *Rural-Urban Migration in Indonesia*. Jakarta: LEKNAS-LIPI.
- Suparlan, Parsudi. 1963. Masyarakat Sangir Talaud di Tanjung Priuk: Dengan Latar Belakang Masyarakat Sangir Talaud di Sangir Talaud. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- . 1976. The Javanese in Surinam: Ethnicity in an Ethnically Plural Society. Unpublished Ph. D. Dissertation. University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Surjohardjo, Sukanti. 1974. Empat Kasus Masalah Gaya-Hidup Keluarga-Batih Suku-Bangsa Jawa di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Swasono, Meutia Farida Hatta. 1974. Generasi Muda Minangkabau di Jakarta: Masalah Identitas Sukubangsa. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Tantu, Hammado. 1979. Hubungan antara Desa dan Kota (Study Lapangan di Pulogadung, Jakarta Timur). Unpublished Research Report. Jakarta: Pusat Latihan Penelitian Ilmu-Ilmu Sosial Jakarta.
- Temple, Gordon Paul. 1974. Migration to Jakarta: Empirical Search for a Theory. Unpublished Ph. D. Dissertation. University of Wisconsin.
- Volkstelling 1930 Deel IV*. 1935. Batavia: Departement van Economische Zaken.
- Vredendregt, Jacob. 1964. Bawean Migrations: Some Preliminary Notes. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 120: 109-137.
- Waworuntu-Osman, Osmaliana. 1975. Perubahan Peranan Mamak pada Keluarga Minangkabau di Jakarta (Suatu Case Study). Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Ilmu-Ilmu Sosial, Universitas Indonesia.
- Yunus, Hadi Sabari. 1978. Seasonal Migration in Jogjakarta. SEARAP Research Report No. 86. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.